

ま風 金曜日

「グレーを訴えよう」  
そんな無謀と思えることを  
考え、実行に移す日本人経営  
者がどれほどいるだろうか。

2011年春、グレーや  
ヤフーといった巨大IT企業  
など13社を相手に、米国で特  
許侵害訴訟を起こした。1年  
後、グレーなど12社と和解  
し、特許ライセンス契約を勝  
ち取った。

メールなどが届くと小さな  
通知画面が現れて知らせてく  
れる機能。インターネットで  
検索した内容に関連した広告  
が配信される仕組み。通信が  
中断しても確実にデータを送  
信する技術。いずれもイーパ  
ーセルの特許技術だ。

訴訟の目的はただひとつ。  
「イーパーセルが持つ特許

きたの・じょうじ 1962年、岡山県生まれ。  
86年、早大理工建築卒。損害保険会社の契約  
社員となった。91年に保険ディーラーを起業。  
2000年、イーパーセルに入社した。04年、代  
表取締役社長に就任。東京・谷中の臨済宗寺  
院「全生庵」を舞台に、政財官界の幅広い著  
名人と交流する勉強会「谷中の政経塾」と座  
禅会「谷中で座る会」を主宰する。

北野 譲治 さん  
イーパーセル社長



しに

ほんご

NIHONGO

# 公私ともに「いつでも全力」

技術は、世界的なIT企業が採用する『世界標準』であると証明すること。グレーと闘った男はそう語る。  
イーパーセルの創業者に強く請われ、00年の日本人設立時から参画した。だが、営業先で「技術はいいけど、うちが欲しいのは『世界標準』の技術なんだよ」と何度も体よく断られる経験をした。

ベンチャー(新興企業)と

いうだけで、技術が正当に評価されない日本の「特異な企業文化」に阻まれ、もがいた時期。支えの一つとなったのが、臨済宗の傑僧、正受老人が残したこの言葉だ。

「大事と申すは今日只今の心也」

「昨日の失敗を悔いるな。」

明日の夢におぼれるな。今日一日を全力で生き抜くために励み努めよ」

若い頃に出会った人生の師、四元義隆氏(故人)から、そう贈られた。四元氏は、中曾根康弘元首相ら歴代首相の「指南役」とも言われた人物。

政治や経営を目指す若者に「自分を捨て去れ」と薫陶し続けた。四元氏の影響で始めた座禅は、今も定期的に続け、「無私」を磨いている。

巨大IT企業への勝利が経済誌などで報じられると、問い合わせが殺到した。今や全世界の大企業を中心に約7000社を顧客に、ネット上で秘匿性の高いデータを安全・確実に送り届ける「電子宅配便」サービスを展開し、日々

の企業活動を支えている。まだまだ高い目標がある。「米国のように巨大なベンチャー企業が育つ社会へと日本を変革したい」

自社の特許技術がその助けになればと願う。

毎年、仕事以外の目標にも挑戦している。18年は「神道を学び、奈良仏教に触れる」がテーマだった。休暇も利用し、伊勢など全国の神社を正式参拝し、飛鳥から白鳳・天平時代までの社寺を巡った。今年も「伝統仏教宗派の本山を訪ね歩く」だ。

プライベートの充実感も、仕事にも還元されると感じている。「いつでも全力」を交えるつもりはない。

(政治部 湯本浩司)



版画・大野隆司

## かしこ

手紙書き上げた瞬間の喜び

小学生の頃、親戚にお年玉をもらうのがうれしくもあり、憂鬱でもあった。「拝啓」から始まり「かしこ」で終わる、ていねいな礼状を書く。それが我が家の約束事だったからだ。  
簡単な挨拶だけではなくて、学校の近況なども記すので、一通につき、原稿用紙2、3枚分となる。下書きを母に見せて、オッケーが出ると清書に入るのだ。  
文章を書くのは当時から得意だった。下書きはまだいいのだが、清書がわたしの「敵」だった。集中力が途切れて、漢字を間違える。一字なりいまかせるけれど、2か所も3か所もあると汚いので全文書き直しせざるを得ない。

吉野万理子



## もったいない 語 辞 典

だから最後に「かしこ」と締めくくる瞬間が、ひたすら待ち遠しかった。その文字に到達すると、「やったー」と快哉を叫んでしまうほどだ。  
時代は変わった。今、わたしが小学生なら、メールで許されていたはずだ。「拝啓」も「かしこ」も必要ない。字を間違えたら、カチカチとキーボードを操作して、書き直せばいい。楽ちゃん、楽ちゃん。ただ、その場合、完成した瞬間あの喜びも味わえないわけだ。それはちょっとさびしい。  
手紙ありがたう、と親戚はみんな返信や電話をくれた。大変だ憂鬱だと言いながら、結局、楽しい思い出になっている。(作家)

\*『にほんご』は毎週金曜日掲載。次回(25日)は黒井千次さんの「日をめぐる音」(毎月最終金曜日掲載)の予定です。

## 方言 探 偵 団

香川県

香川では、暗い場所やお化けなどを怖がる子供に向かって母親が「あんた、おとっちゃんやなあ」などとまやなあなどと言っていることがある。「お父様」と誤解しちゃうが、実は「臆病者、怖がり」という意味の方言だ。

「おとっちゃん」という地域もあることから元の形は「おとろし屋」。「おそろしい」が変化した「おとろしい」は江戸時代に関西を中心に使われたようだが、当時の方言集「物類称呼」に「おそろしは畿内近国或は加賀及四国などにて、をとろしい」と記されている。

## おとっちゃん

「屋」には「恥ずかしがりや」「わからずや」などと言ふようにそのような性質の人物を表す働きがある。つまり



画 成田輝昭

「おとろしや」は「怖がるよるな人」ということだ。

この「おとっちゃん」は子供に対して使うことが多く、奮起を促す応援の気持ちが込められていると言おう。同じ「臆病者」に対する言葉でも、相手を見下すような「ビビリ」「チキン野郎」とは大違いの表現なのである。  
篠崎晃一・東京女子大学教授